様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2015～2016
課題番号：１５Ｈ０６７２５

研究課題名（和文）シュティフターとシュトルムの文学における「障がい児」像

研究課題名（英文）An Analysis on the Representation of 'Children with Disabilities' in the Literature of Stifter and Storm

研究代表者
藤原　美沙（FUJIWARA, Misa）

大谷大学・文学部・講師

研究者番号：２０７６００４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、従来の文学における「子ども」像研究では着目されることが少なかった「障がい児」描写とその文学的意義について、シュティフターの『電気石』（1853）、シュトルムの『白馬の騎手』（1888）を中心に考察した。
　主な成果は、障がい児描写に内包される不可思議で神聖な特徴がロマン派的子ども像と重なり合うこと、また同時代の社会不安が彼らに投影されていることを検証し、それらが作品内全体の多層性を生み出していることを再評価したことである。

研究成果の概要（英文）：This project has attempted to analyze representations of children with disabilities in nineteenth century Germany and Austria, especially in the writings of Adalbert Stifter (1805-1868) and Theodor Storm (1817-1888). The project has aimed to develop research into new perspectives on the representations of children including contemporary social problems as well as attributes of romantic images of children in German literature. The project hopes that careful consideration of ambiguous aspects of children with disabilities will enhance the complexity of Stifter and Storm's work.

研究分野：人文学、ドイツ文学

キーワード：シュティフター　シュトルム　詩的リアリズム　ドイツロマン主義　子ども　障がい児　障がい

１．研究開始当初の背景

18 世紀後半からはじまるドイツ初期ロマン派文学において、「子ども」は人類の黄金期の体現として称揚されてきた。宗教的性質を有する表象としての「子ども」の誕生背景には、人間の陶冶可能性をあらわした、ルソーの『エミール』（1762）の影響はもちろんのこと、人間の„Bildungskraft“（形成力）に関するヘルダーの人間学の思想があった。このような、同時代の思想を反映する文学における「子ども」像に関しては、G. Schaub（1973）、H-H. Ewers（1989）、Y-P. Alefeld（1996）などの著作をはじめ、国内外にすでに一定の蓄積がある。また、Ph. Ariès（1960）を嚆矢として、I. Weber-Kellermann（1974）や H. Cunningham（2005）らは、社会学的観点から「子ども」という存在を照射し、ロマン派的「子ども」像の背後に隠された、現実社会における「子ども」観の変遷を明らかにしている。

また、1848 年以降の詩的リアリズム文学における「子ども」像研究は、近年盛んに行われている。特に、シュトルム文学にみられる幼年期回顧のロマン派的傾向（Detering, 2011）や、シュティフター、ケラー、シュトルムの文学における「子ども」間で交わされる愛情表現に関する研究（Susteck, 2010）は、主体性をもつ新たな「子ども」の発見として、特筆すべきものである。だが、この時期にとりわけ目立つ「障がい児」像に関する研究は、これまで行われていない。

研究代表者はこれまで、理想郷を体現するドイツ初期ロマン派的「子ども」像との連続性・非連続性の観点から、後期ロマン派の詩人ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ（1788-1857）の「子ども」像を研究してきた。その研究を通じて明らかになったのは、アイヒェンドルフにおける「子ども」とは、喪失を強く意識されているがゆえに、文学を通して再創造されるべき存在として描かれていることである。研究代表者は、この現実と理想が混在する不安定な「子ども」像が、アイヒェンドルフの文学に「新たな子どもの創造」というダイナミズムを与えている現象を、詩的リアリズム文学における主体性をもつ「子ども」描写や、19 世紀後半から 20 世紀にかけての児童心理学の隆盛へといたる、重要な過渡期的現象として捉えている。そしてその過程で、詩的リアリズム文学において、「障がい児」描写が目立つことに着目した。彼らは自然や動物と意思疎通を行い、彼岸との関係性を強調される。こうしたロマン派的特徴はとりわけ、身体的・精神的な「障がい」と関連づけて描かれている。しかしながら、従来の研究においては、子どもの「障がい」を、親の「罪」のあらわれとみなすにとどまり、「障がい児」の存在をネガティブなものとして捉える傾向にある。

上述の研究背景において、研究代表者は、こうした「障がい児」像のなかに、該当時期の社会における問題意識が反映されていると同時に、文学作品としての多層性がうみだされているのではないかという着想を得るにいたった。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の二点に集約される。

⑴ 詩的リアリズム文学における「障がい児」を、ロマン派的「子ども」像の変容とみなすと同時に、そこに同時代の社会問題が反映されていることを明らかにすること。

⑵ 文学表象としての「障がい児」像を通して、文学作品内に社会性、宗教性、幻想性等、多層性がうみだされている様を解明すること。

そのために、ドイツ語圏における詩的リアリズムの代表的作家である、アーダルベルト・シュティフター（1805-1868）とテオドア・シュトルム（1817-1888）の文学に登場する「障がい児」像を考察対象とした。それぞれの作品における研究目的は以下の通りである。

① シュティフターの短編『電気石』（1853）における、頭部腫瘍を患い、言語能力にも遅れがみられる少女について分析を行い、ロマン派的「子ども」像との関連性だけでなく、19 世紀ドイツ語圏の「子ども」観や、障がい者に対する社会認識も明らかにすること。

② シュトルムのノヴェレ『白馬の騎手』（1888）に登場する、知的障がい児「ヴィーンケ」に関する分析を進め、他の子どもと比較した際に明らかになる、感情の希薄さや言語能力の欠如が、本作中にちりばめられる「生者と死者」、「人間と動物」、「親と子」、「家庭における愛情と不和」等の二項対立的構造を融和させる機能を果たし、それが本作の怪奇的・幻想的一面に寄与していることを明らかにすること。

３．研究の方法

シュティフターの『電気石』ならびにシュトルムの『白馬の騎手』を分析するという方法をとった。資料収集に際しては、ウィーンのシュティフターハウス、フーズムのシュトルム・アルヒーフに赴き、日本では入手困難な季刊誌、年鑑に目を通すよう努めた。以上を踏まえた上で、本研究は次のような手順で行われた。

⑴ シュティフターとシュトルムの上述の作品に関する一次文献ならびに二次文献を網羅し、とりわけ「子ども」、「障がい」に関する言及を分析する。

⑵ 同時代における教育論や、子どもの精神疾患、身体疾患の捉え方とその療養方法について、文献調査を中心に分析し、文学作品における受容を分析する。

⑶ ロマン派的「子ども」像と「障がい児」の共通項と相違点をまとめ、後者に同時代の社会問題の投影を見出すことができるかを検証する。

(4) 障がい児表象の中に、ロマン派的特徴と同時に社会問題の投影をも見出す時、その文学作品全体における意義と、「障がい」という表現そのものに関して再考する。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

本研究の最大の成果は、計 2 回のドイツならびにオーストリアでの資料調査・収集である。調査で得た資料は、適宜分析を進めた。それらに基づいた成果報告として、2 年間で 4 件の口頭発表、1 件の論文執筆が成った。概要は以下の通りである。

① 2015 年度

シュティフターの『電気石』における頭部腫瘍という身体疾患と、精神面での発達遅延が見られる少女についての考察をすすめた。成果報告として、2015 年 12 月に開催された阪神ドイツ文学会第 219 回研究発表会にて口頭発表を行い、少女の存在が父親の罪と狂気を理解しえないものへと昇華しながら、一種の救済をもたらしていることを明らかにし、ロマン派的「子ども」像との連続性として、本作の少女像を位置づけた。この発表は、次年度の日本独文学会シンポジウム企画へと結びつき、シュティフターの『アプディアス』（1842）における盲目の少女像研究を深める契機となった。

また、2016 年 2 月にはオーストリア・リンツのシュティフターハウスを訪れ、当機関が発行している季刊誌のバックナンバーや、シュティフターに関する展示をまとめた論集を調査収集することができた。

② 2016 年度

前年度の口頭発表における質疑応答をふまえて、シュティフターの『電気石』に関する考察を深めた。また、シュティフターハウスで調査収集した資料を読み込み、論拠として論文内に組み込みんだ。本作中の少女が「障がい」を抱えていることにより、ロマン主義的「子ども」像が歪んだかたちで再創出しているだけでなく、ロマン主義的「子ども」像と現実社会における、あるべき子ども像が交錯することなく混在し、その歪みが少女の「障がい」として眼前に提示されていることを明らかにした。成果報告として、2016 年 7 月発行の大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』に論文を掲載した。

また、2016 年 8 月には、ドイツ・ビーレフェルトのベーテルを訪れ、精神疾患者についてのドイツ国内における認識の変遷や、療育方法の変遷の歴史を調査した。また、フーズムのシュトルム・アルヒーフを訪れ、シュトルム関連の文献収集と最新の研究動向を把握することができた。

これらの成果報告として、2016 年 9 月に開催された大谷大学西洋文学研究会年次研究発表会にて、シュティフターの『電気石』を取り上げ、「穏やかな法則」から逸脱した「年金生活者／父親」と「大きな頭部の少女／娘」の描写について検証した。本作が、彼らの内包する歪みを解消せずに保留することで、現実との隔たりを浮き彫りにし、物語としての不可思議さ、異様さ（幻想性）として演出していること、 そのために「少女」は本作中で提示される教育、社会化、幻想という理念の受け皿とならなければならないことを明らかにした。

また、2016 年 10 月の日本独文学会シンポジウムでは、『アプディアス』における少女の視覚障がいについて、シンポジウムのテーマである「かけがえのなさ」の形成と結びつけて論じることができた。この発表は 12 月に開催された日本ヘルダー学会での口頭発表の機会を得ることにつながり、盲目のディータが形成する世界と、周囲の視覚優位のそれが、最終的には仮象として提示されていることを、シュティフターのヘルダー受容の観点から考察することができた。シンポジウムでの発表は、すでに論文としてまとめ、2017 年秋に刊行される予定である。また、ヘルダー学会での口頭発表分は現在論文執筆中である。

(2) 今後の展望

本研究では、2 回にわたるドイツ、オーストリアの調査によって、現地のシュティフターやシュトルムの研究者との人脈を得ることができた。このことにより、それぞれの作家について討論する機会が増え、さらに「障がい」という観点から作品を再評価する可能性が見えてきた。シュトルム研究については、現在国内における口頭発表を申請中であると同時に、2017 年 9 月にフーズムで開催されるシュトルム生誕 200 周年の研究大会に参加する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①Misa Fujiwara: Das fiktive Ich oder die Suche nach der *Wahrheit*. Überlegungen zu Eichendorffs autobiografischem Versuch *Unstern*. In: Nachleben der Toten — Autofiktion. Hrsg. v. der Japanischen Gesellschaft für Germanistik. Unter der Leitung v. Hiroshi Yamamoto und unter Mitw v. Mechtild Duppel-Takayama, Arne Klawitter, Masanori Manaba, Thomas Pekar und Thomas Schwarz. München 2017, S. 117-127. 査読有

②藤原美沙「歪められたロマン主義的「子ども」」、『西洋文学研究』第 36 号、2016 年、25-41 頁、査読無

※この他、学会発表②をもとにした叢書論文の掲載が確定している。

〔学会発表〕（計 4 件）

①藤原美沙「シュティフターの『アプディア

ス』における「盲目」について――ヘルダー受容の観点から」、日本ヘルダー学会 2016 年度秋季研究発表会、2016 年 12 月 11 日、関西学院大学大阪梅田キャンパス（大阪府・大阪市）

②藤原美沙「シュティフターの『アプディアス』における＜かけがえのない＞存在――「等価／不等価交換」の観点から」、日本独文学会秋季研究発表会シンポジウム「＜かけがえがない＞とはどういうことか？――近現代ドイツ語圏文学における交換（不）可能性の主題」、2016 年 10 月 22 日、関西大学（大阪府・吹田市）

③藤原美沙「幻想・教育・社会化――シュティフターの『電気石』における受け皿としての「子ども」」、大谷大学西洋文学研究会、2016 年 9 月 16 日、大谷大学（京都府・京都市）

④藤原美沙「シュティフターの『電気石』における少女の障がいについて」、阪神ドイツ文学会第 219 回研究発表会、2015 年 12 月 13 日、近畿大学（大阪府・東大阪市）

６．研究組織

(1)研究代表者

藤原　美沙（FUJIWARA, Misa）
大谷大学・文学部・講師
研究者番号：２０７６００４４